

「？」

「ああ……」

「こんにちは、武珠司です」

「直接お会いするのははじめてですね……よろしくお願ひします」

「不思議な気持ちです。今日が来るのが楽しみで、時間を作つてはあなたの資料を眺めていたので……まるで遠足に行く前の子供見たいですわね、お恥ずかしいですわ」

「ありがとうございます」

「ふふ、資料に紅茶派と書いてあったので注文しておきました」

「それで……単刀直入に言わせていただきますと、わたしはあなたとすぐにでも結婚したいと考えております。条件は申し分ない……という言い方は失礼ですね。わたしの理想の結婚相手があなたでした。……あなたもそう思つてくれると嬉しいんですが……いかが、だつたでしようか？」

「本当ですか！？ 嬉しい……うふふ……それでは、このまま話を詰めていきたいのですが……わたし、ひとつだけ確認したいことがあるんです……セックスの相性を……事前に確かめたくって」

「ふふふ、そんなに驚かないで下さい。わたしとあなたの AI マッチング結果は高スコア……家柄、学歴、性格の相性は運命的なほど合致しています。ですが、性行為は実際にみてみないと分からぬでしょ？ 夫婦生活において、夜の営みは避けて通れませんし……」

「ご理解ありがとうございます。それで質問、というか確認なのですが……あなたは女性にリードされたい、いじめられたい、責められたいと考えるマゾヒストなんですか？」

「あけすけな質問で驚いたかしら？ けれど、ここははつきりと、資料に印刷された文字だけではなく、あなたの言葉で知りたくて……答えていただけますか？」

「ふふ、恥ずかしそうな顔を浮かべながらも答えてくれるのですね……嬉しい……」

「あなたの希望条件は把握しています。妻として、責任を持つてあなたの望むプレイに応えてあげます。心から愛してあげるし……マゾのあなたが気持ちよくなりすぎて頭がおかしくなっちゃうぐらい……わたしの言葉とおちんちんで可愛がってあげる。だつてわたしたち、夫婦、になるんですものね」

「はあっ……わたしの言葉に期待して、わたしに何をされるのか想像してる顔……かわいい……はあっ……」

「んんっ……失礼、独り言ですわ。それで……この顔見せが終わったらすぐセックス、というのも難しいでしょ？　あなたの予定の都合と、身体と心の準備ができたらご連絡していただけますかしら？」

「ふふ、それでは、今日はこのくらいでお開きにしましようか。来て下さってありがとうございます」

「どなた?」

「はい、少々お待ちになつて」

//可能ならドア越しのように加工ここまで

「ふふ、お久しぶりです。と、言つてもまだ二週間も経つていませんのね……。今日はお仕事お休みだつたんですか?」

「ええ、この間お会いした時と比べると汗の匂いがしなかつたので……」自宅でシャワーを浴びてきたのかしら、と推測したまでです。ああつ、そんな、謝らないで下さい。く、臭かつたわけではないんですよ? わたし、少し人より鼻が効くもので……」

「どれぐらい鼻がいいか、ですか? エエと、すれ違つた方が付けている香水がどこのメーカーか分かる程度、かしら……? もちろん自分が嗅いだことのある商品に限りますけど……すごいですか? ふふ、友達には地味な特技と言われるで褒めていただけて嬉しいです」

「や…………こちらへ……」

「こちらのベッドに腰掛けていただけます?」

「隣、失礼しますね」

「身体の相性を確かめるたには……そうですね……まず裸で触れ合うことですね。わたしの服、脱がせていただけます?」

「手を上げればよろしいの? ふふ、ばんざーい」

「あ?……」

「ふふ、今日はあなたに会うから、気合を入れた下着を着てきたんです。あなたの趣味に合えば嬉しいんですが……どうでしようか?」

「よかつたあ……次は立てばいいのね?」

「ふふ……こんなに近いと……あなたがわたしの腰に手をかけた時に、心臓の音が大きくなつたの、バレていそうですね……これからもつと見せたり、見せられたりするのにわたし、これぐらいでドキドキしちゃって……お恥ずかしいです……」

「ん……」

「あなたも緊張して、ドキドキしていらっしゃるんですね？」

「ふふ、それならお揃いですね」  
「次はストッキングですけど……どういう姿勢になればいいかしら？ ベッドの縁に手をついて、お尻をあなたに突き出せばよろしいの？」

「んっ……」

「はあっ……あん……」

「今度は私があなたを脱がせる番ですね。失礼します」

「こうやつてシャツのボタンをひとつひとつ外していくの、もどかしいですけど、ゆっくりとあなたに触れていくようで、同時に期待で胸がときめいてしまいますね」

「ズボンは……あとにしましようね」

「はあ……」

「ブライジャーのホック、外していただけますか……？」

「んっ……」

「外すのは私がしますね。んしょっと……」

「ふふ……おっぱい、丸見えになつてしましましたね。わたしのおっぱい、大きいでしょう？ ちょっと失礼しますね」

「いきなりブラをあなたの顔に押し付けてごめんなさい。でも、これで私のおっぱいがどれぐらいのサイズか実感できましたでしょ？ あなたの顔よりも少しだけですが、私のおっぱいの方が大きいんですよ？」

「このまま目を閉じて、大きく深呼吸してみて下さい。ブラカップの中に染み付いた私の汗の匂いを感じられると思いますよ」

「あら……一回だけでいいと思ったのにそんなに何回も深呼吸なさるなんて……私のニオイ、気に入っていただけました？」

「ふふ、嬉しい……それに……」

「その言葉、本当なようですね」

「まだほんとど何もしていないのに、ズボンが膨らんでますよ。わたしの身体に興奮しているんですね？　でも、わたしも同じです……」

「はあ……」

「わたしもこの通り、ショーツがはち切れそなぐらい、あなたに興奮しておちんぽを硬くしてしまってます……いいえ、あなたよりも興奮しているかも分かりません。ちょっとそこに座つたままでいて下さいますか？」

「はあっ……わたしのおちんぽ……あなたにドキドキして、興奮して勃起してしまってるおちんぽ……見て下さい」

「んっ……はあっ……」

「ああっ、ごめんなさい、私のおちんぽが大きいせいで、あなたの顔に当たつてしましました。痛くはありませんか？」

「大丈夫ならよかったです……改めてご覧下さい、これがわたしのふたなりおちんぽです。結婚したら何度も何度もあなたのナカに入れるおちんぽ、あなたを抱くおちんぽなんですから、ご挨拶して下さい。簡単に触るだけでもいいんですよ」

「んもう、ご挨拶、して下さい！」

「んっ……こんな感じでおちんぽに触って、硬さや大きさを感じてみて下さい」

「はあっ……状態としては半勃起、程度でしようか……でも、あなたが遠慮しながらも丁寧

に触ってくれるから……はあ、自分で触ってるのとは全然違う優しいタッチにおちんぽ興奮してしまって、ちょっとずつ硬く、大きくなりながら上向きに反り返ってきてるの、分かれますか……？」

「んんっ……あなたに触られているおちんぽ気持ちいい……でもお……ふんわりしたタッチだけだと物足りなくなつてきました……はあっ……申し訳ないんですけど……私のおちんぽを握って、シコシコと手コキをしてくれますか……？　触るだけじゃなくて、私がどんな風に気持ちよくなつて射精するのか、あなたに見て貰いたいんです……」

「はあっ、んっ、ふ、はあ……んっ、んんっ、はあ、ん……」

「はあっ、あなたの、壊れものを扱うみたいに優しく握り込んで、おつかなびっくりつて感じでゆるやかにシコシコするの……たどたどしいはずの手コキなのにすごく気持ちいい……はあっ……いいよお……あなたにおちんぽ扱かれるの、気持ちいい……」

「んっ、はあ……あっ、んんっ……はあ、はあ……ふう……んっ、んっ、んっ、んっ……だめ……腰、勝手に動いちゃう……はあっ……はあっ……わたし、お尻揺らして……もつと気持ちよくなろうとしちゃってる……」

「ね……もつと激しく動かして……おちんぽぎゅつて握り込んで、わたしが痛がるぐらい激しくシコシコしてわたしにはしたない声を出させて下さい……はあっ……わたし、もう、気持ちよくなりたくて切ないんです……はあっ、あ、んんう、はあっ……」

「はあっ、はあ、んんっ、ふ……はあっ、はあっ、あ、んんっ……くうっ……さつきよりは、激しくなりましたけど……まだ足りない……はあっ……あの……お手本をしますので……手、一度止めていただけますか？」

「はあっ……では……私がふたりおちんぽはどうシコシコするかのお手本をお見せしますね。まずは先端からおもらしみたいに溢れ出てる先走りを指に絡めてローション代わりにして……」

「カウパー液で手全体を濡らしつつ、おちんぽにも絡ませて全体の滑りをよくしてから、んっ……おちんぽを両手で握り込んで……」

「はあっ、あ、んんっ、はあっ、はあ……あっ、ああ、んんっ、ふ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……あんっ……あなたにフル勃起おちんぽ見せつけながらガニ股センズリしちやつてるう……恥ずかしいのに気持ちいいのぉ……はあっ、あんっ、あ、ふう、んんっ！ はあっ、あ、んんっ……あつあ、はあっ」

「はあっ……わたし、裏筋を刺激するように指に力を入れてえ……はあっ……シコシコしながら亀頭を撫でるのが好きで……はあっ……よーく見てえ……ふうっ……んっ……おおっ……！ おちんぽにあなたの視線が絡みついてくるう……はあっ……目で愛撫されてるみたいな気持ちになってしまいますわ……はあっ、あ、んんっ……ふ、ああん……！」

「はあっ……はあっ……あなたに見られながらセンズリするの気持ち良すぎて……いくまでずつとシコシコしてみたいと思つてしましましたが……はあっ……それじやあ意味がありませんものね……ふううつ……」

「はあっ……さあ……あなたが熱い視線で見ていた、オチンポをいじるわたしの手の動き、もう覚えましたわね？ あなたの記憶の中でわたしはどうオチンポを刺激していましたか？ やつて見て下さい」

「はあっ……そう……いいわ……そうやつて手指にカウパーを絡めてえ……ん、はあっ……あなたの手汗とわたしのチンポ臭が絡み合つて……すうううつ……はあっ……脳にびりびり来ます……」

「はあっ……んっ、く、はあっ……んんっ、はあっ、あっ、んっ、はあ、くつ……すごい……さつきとぜんぜん違う……わたしの手付き、とてもよく観察してくれていたのね……はあっ……わたしに奉仕するためじっくり見ていたの？ それとも……んふ……今夜のオカズにするつもりだつたのかしら……？」

「はあっ、はあっ、はあっ……ん、はあ、あ、んんっ……ふうっ、あ、いいっ、はあ、あっ、ああ……！ いいわあ……あなたのお陰でおちんぽとつても気持ちいいの……はあっ……思わず腰揺れちゃう……はあっ……はつ……んっ、く、う……！」

「んっ……はあっ……もつと扱いて……はあっ……あ、んんん……！ 上手ですよ……ふうっ、んんん……はあっ……！ ああっ……ね、わたしのキンタマ触つてくださいま

す？」

「はあっ……あ、んんっ……キンタマ下から掬い上げてたゆんだゆんされるの好きい……はあっ……あん……わたしのキンタマあ……ずつしりしてるの分かるかしら……？ あなたにシコシコされて気持ちよくなつたチンポからあ……ここに溜まつてる精液全部出しちやいますからね……はあっ……あ、んんっ、く、はあっ……！」

「ふううつ……あんっ……あ……！ はあっ……あんっ……！ はあっ、出ちゃう……せーえき、出るうつ……！ はあっ……お願ひ……手をわたしのオチンポの先に当てて……あなたの手をティッシュ代わりに……精液受け止めて頂戴……！」

「はあっ、あんっ！ あ、はあっ、あっあ、はあっ、あ、いく、いく……あ、あっ……！」

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……はあっ、あ……んんっ……はあっ……！」

「はあっ……ありがとうございます。とても気持ちいい手コキでしたよ。次は……いっぱい射精して精液まみれになつた汚れおちんちんを舐めてもらえるかしら？ はあっ……」「ね、見て……あなたにお掃除フェラされると思つただけで、わたしのおちんぽ興奮して、射精したばかりなのにもう半勃ちになつてしまいました……はあっ……恥ずかしながら、ふたなりのおちんぽは男性より持久力が高くて、こんな風にすぐに元気になつてしまふんです」

「わたしのために……おちんぽ掃除、できますよね？」

「んっ……ぺろっ、ぺろっ、と飴を舐めるみたいにされるのも気持ちいいですが……わたしがして欲しいのはフェラチオ……ふふ、あなたのお口全体を使って、わたしのおちんぽを掃除して下さいな？」

「はあっ……んっ……そう……歯を唇で包んで、おちんぽを傷つけないようしてくれるのでね……嬉しい……その気遣いだけでイつてしまいそう……はあっ……そう……上手よ……喉奥で亀頭締め付けて……はあっ……唇をすぼめて……自分のお口をオナホだと思つて動いてみて……はあっ、ああっ……素敵……あなたのフェラチオとっても気持ちいいわ……はあっ……あ、あっあ、はあっ、んんっ！」

「ふううつ……ううつ……はあっ、あ、んあっ……はあっ、あんっ、はあっ、あつあ、んんっ、はあっ、あつ、あつ、あつあつあつ、あんっ！ ああっ、あんっ、はあっ、あつあ、んんっ、はあっ、あつあつ、ああんっ！」

「ふううつ……いいよお……あなたがおちんぽペロペロするの気持ちいいからあ……さつ  
き出したばっかりなのにキンタマまた重くなつてきてるうう……射精欲求刺激されて……  
はああっ……精液どびゅどびゅしたいい……はあつ……あ、んんつ、く、はあつ……！」

「ああっ、ん、はあっ、あっあ、いいつ、いいよおつ……！ はあ、あんつ、あ、つく……んつ……はあっ、あっ、あんつ！ はあっ、あっ、あっ、あんつ……ふーつ……んつ、あっ、あ、あっあ、あんつ、はあっ、あっ、んんつ、あっ、ひつ、あっ、あ！ はあっ、あ、んんつ！」

「ああつ……だめえ……いつちやう、いつちやうよお……もつとあなたのフェラチオ味わいたいのにい……あなたの喉まんこ擦つてる先つぽがくぱくば言つて射精準備しちやつてるう……はあつ、はあつ、はあつ……でも止めて欲しくないの……もつとちゅうちゅううぺろべろして……はあつ……わたしのこと射精させてえ……！」

「はあっ、はあっ、はあっ、あっ、いく、おちんぽおっ！ おちんぽ我慢できない……！ はあっ、あなたのお口にできたてザーメン注ぎ込ませてえ……！ はあっ、あ、んんっ、くうっ、は、あっ、あ、はあ、あ、んんっ……！ あ、ああっ！」

「はーっ……出でる……おちんぽドクドクって音立てて、あなたの口に精液注いでるう……はあっ……吐き出してもダメ、ごっくんしてえ……わたしの精液の味、あなたの内臓にまで覚えさせて……」

ん  
つ  
…  
[ ]

「はあっ……はあっ……本当にごっくんしてくれた？」お口を開いて確認させて……？」

「ふふ、本当に飲んでくれたんですね、嬉しい……わたしをイかせてくれた上に精液飲み込んで、とても偉いわ……はあっ……」

「よろしかつたら、このタオルで手と口を拭いて下さい」

「はあ、それでもとつても気持ちよかつた……あなたのおちんぽ奉仕、わたしと相性がいいみたいね……はあっ……本当に幸せ……」

「次はわたしの番ですね。あなたのおちんぽにご奉仕……くすつ、違うわね……。あなたの  
おちんぽをいじめさせてね」

「わたしのおちんぽを知つていただいた次は……あなたのおちんぽについて知りたいです。今度はあなたが立つて、わたしにおちんぽを見せていただけますか？」

「あら、まだ何もしてないのに、ズボンがぱつんぱつんのテントを作つて……」

「もしかして、勃起、しちやつてるのかしら？ うふふ、手コキ奉仕とフエラチオ奉仕しただけで興奮しておちんぽ硬くしちやうなんて……どんなことを考えていたの？ わたしのおちんぽに犯されたいって考えながらシコシコしてくれていたのかしら……それとも、奉仕してるって事実だけで気持ちよくなっちゃつたの？」

「顔を赤くしてもじもじして……図星みたいね？」  
ふふふ、本当に変態のマゾオスさんなんですね……」

「ズボン脱がしてあげますね……今度は下着越しのおちんぽがどうなつてるか知りたいです……」

「ふふ、下着にシミを作っちゃつて……触られる前から先走りのお汁を垂らしちゃうぐら  
いのすけベマゾのおちんぽは、一体どんな匂いがするのかしら……？」

「こうやつて股間に鼻を押し当てて深呼吸するだけで……発情したオスの匂いが肺の奥まで流れ込んできて……ぞくぞくしちやう。もっとわたしのことを興奮させて……すーっ……はーっ……すううつ……はあっ……」

「ふーっ……ふーっ……ふーっ……わたくしの鼻におちんぽの先が当たるから……ドキドキしちゃう……んふふ、わたしを誘惑するなんて……はあむっ」

「腰を引いて逃げちゃダメですよ。直に触る前に下着越しにおちんぽべろべろさせて下さ  
いな。べろ、ちゅううつ、ちゅつ、れえろつ……はあつ……ちゅつ、べろべろれるれる……」

「うふふ、下着の生地に唾液が染み込んでじつとり濡れて……おちんぽの形がくつきりとしてきましたね……ふふふ、あなたのおちんぽの先端は、こんな形をしていらっしゃるのね。早く見てみたいけど、もう少し我慢をして……ちゅつ、ぺろ、れる、ちゅ、ちゅぱ、ちゅつちゅ、れえろ、れる、ちゅぱ、ちゅうつ」

「欲しがってる視線を向けないで下さい。我慢しているわたしも辛いんですよ?ちゅぱ、ちゅつちゅ、れろ、ちゅぱ、ちゅつちゅ、ちゅうつ、くちゅくちゅ、ちゅつ」

「うふふ……おちんぽが切なそうに下着の中で暴れ回ってる……気持ちよくなりたいって言つてるみたい……えつちなんですね……ぺえろ、はむ、ちゅつ、はむはむ」

「あらあら、まだまだ序の口なのに腰をかくつかせちゃって……そんなにこらえ性がないと、これからどうなるか分かりませんよ? うふふつ。でも今日は特別に、焦らすのはこれぐらいにしておきましょうか。それではあなたのおちんぽ拝見いたしますね……」

「あら……うふふ、下着越しのシルエットで薄々察してはいましたけど……私と比べると随分……ふふ、かわいらしいんですね。おちんぽと『うより……おちんちんかしら』

「あなたのかわいいかわいいおちんちんは、一体どんな味なのかしら? 確かめさせて下さいね」

「ちゅつ、ちゅぱ、ちゅつ、ちゅつちゅ……ふふ、鈴口にキスするとおちんちんがぴくん、ぴくんって跳ねて……陸に上がった小魚みたいですね。ちゅ、ちゅうつ……」

「キスの次は……れえろ、れろ、ちゅつ、れええろつ、れろつ。ふふつ、舐め上げようとしたらすぐに舐め終わつてしましました。何度もベロを往復させられますね。ぺろつ、れろれろ、れる、れろ、れえええろつ、れる、ちゅぱちゅぱ、ねえろ、れえろつ」

「あらあら、おもらししたみたいにカウパーをだらだら染み出しちゃって、まだ挨拶程度のおちんぽキスしかしないじゃないですか……もうちょっと形を味わわせてちようだいな。ちゅつ、ぺえろ、ちゅぱちゅつ、ちゅぱ、ちゅううつ、じゅる、ちゅぱ、ちゅぱちゅぱ……はあつ、ぺろぺろするたびにあなたの匂いが濃くなつてくる……」

「はあつ……わたし、もつとあなたに我慢させようと思つたのに……ふふ、はしたない女でごめんなさいね……あなたが欲しがってるだらう濃厚なフェラチオ、させていただくわ」

「あー……むつ！　じゅるつ、じゅつぽじゅつぽじゅつぽ！　じゅるるつ、じゅぼ、ちゅば、じゅるるつ、れる、じゅば、じゅるる、れえろ、れるれる、じゅば、じゅるるつ！　じゅつぽじゅつぶ、んふう、ちゅば」

「はあっ……ほっペを窄めて、頭を振つておちんぽにむしやぶりつく、わたしの本気のフェラ、いかがですか……？　なんて、答えを聞くまでもないトロ顔……かわいい……もつとそのお顔を見たいから、射精は我慢してね？」

「ちゅつ、ぺろ、ちゅつ、ちゅば、ちゅうつ、ちゅつちゅ、ぺろ、れえろ、れろ、ちゅつば、ちゅば、れえろ、れろ、ええろ、ちゅばちゅば、ちゅつ、ちゅうつ、ちゅば、ちゅつちゅ、れろ、れえろ、ちゅうつ、ちゅば、ちゅつちゅつ、ぺろつ……はあつ……じゅつぶじゅつぶじゅつぶ、れえろ、ねえろ、ちゅつ、ちゅうつ、じゅぶつ、じゅぶぶつ！」

「んつふ……んつ……じゅる、んつく、んつ……！　はあつ……」

「ふふふ……あーん」

「どうですか？　簡単に全部飲み込んでしまいましたよ？　さつきあなたの手に出したわたしの精液と比べてサラッとしたテクスチャーで……明らかに薄かつたです。男性なのに、ふたなり女性よりも弱々しいザーメンなんですね。やっぱり、わたしがあなたのマゾケツに種付けして、孕ませるのが正解みたいね」

「わたしの言葉に興奮しているの？　ふふ、まだ結婚も決まっていない相手に種付けされるのを想像して気持ちよくなつちやつてるのね……かわいい……でも、ふふ、あなたが乗り気になつてくれているのは……嬉しい、ですよ……」

「さて、おちんちんを確かめ合ったところで次のステップに移りたいのですが……あなたは、ふたりと男性の結婚生活で必要なことが何か理解されていて？」

「はい、その通り。殿方のお尻がふたりおちんぽとのセックスに耐えられるか……です。ですので、あなたのお尻の具合を確かめたいのですが……いいかしら？」

「ありがとうございます。それじゃあ、わたしは準備をしますので……あなたはベッドの上で四つん這いになつて下さい」

「嫌がるどころか嬉しそうな顔でベッドに上がるのね、本当にイヤらしい人ですこと。でも、わたしも積極的な方が嬉しいです。それでは、準備を致しますね」

「まずはこのローションをたっぷりと指に絡めて……」

「あらあら、音を立てないようにしても、指が滑っちゃって、くちゅくちゅ、くちゅくちゅつてエッチな音を立ててしまうわ……」

「これぐらいヌルヌルしてたらあなたの尻の粘膜を痛めずに済むかしら……これから指を挿入しますね」

「あら……あなたに苦痛を与えたらいどうしようと思つてたのに……ふふつ、気持ちよさそうな息を吐きながら指ちんぽを受け入れて……」

「指はまだ一本にしたけど、付け根まで入つたから抜き差ししますね」

「ゆー……つくり抜いて……ゆーつくり挿してえ……ローションとお尻の粘膜が擦れて、ちゅぽ、ちゅぽっていう音が鳴つてる……えっちなのね……」

「くちゅくちゅ……くちゅくちゅ……素質があるのかしら？ もう一本……いいえ、二本入れられそうね」

「不安にならなくとも大丈夫よ。わたしを信じて？」

「ん……さすがに少し感触が窮屈だけど平気そうね？ この調子で……」

「抜いてー……挿してー……ふふ、もしかして自分でアナルいじったことがあるのかしら？ 軽く手マンしているだけなのに、もうほぐれて……入口がひくひくって震えていますよ」

「ふう……んつ……はあ……ゆるくなってきた代わりに、腸壁が指に吸い付いて、動かすのが一苦労になってきたわ……指だけでこんなに貪欲にむしゃぶりついていたら、おちんぽハメる時は一体どうなつちやうのかしら……？」

「もうつ、そんなにきゅんきゅん締めてきてはダメ。これから指で円を描くようにぐるぐるうつて動かして、あなたのお尻を拡張していかなきやいけないんだから……」

「んつ、んつ、んつ、んつ……ぐるぐる、ぐるぐる……お尻の中がびくびく震えて抵抗して、それなのに少しづつナカが拡張されてきてる……ふふつ、今わたしの指がどつちに向いてるかわかる？ その通り、上ですね。次は？ 正解、右……時計回りにぐるぐる、次は上から左に逆時計回りにぐるぐると。うふふ、粘膜が驚いて痙攣しちゃってる。怖がらなくて大丈夫ですよ？ 少し我慢すれば気持ち良くなりますからね、よしよし、いい子いい子」

「ふう、お尻の中に挿れた指がバラバラに動かせるぐらいになりましたね。次はもう少し奥を責めて……前立腺からあなたを気持ち良くしてあげましょうか。男の人が気持ち良くなっちゃうスイッチ……えーと、あなたの前立腺はどこかしら？ ここじゃないし、ここでもないし……」

「うふふ、ここにあるのね。えいっ、えいっ、お尻の中からおちんぽ刺激されて気持ち良くなつちやえっ」

「イヤ、じゃないでしよう？ ぐいぐいって押されて刺激されるたびにお尻振りながら声出してるじゃない。嘘つきにはこうやって、中指で思いつきりぐりぐりくつてお仕置きちやいますよ？ まあ……ヨダレまで垂らして……お仕置きにはならなかつたみたいですね？ それなら……気持ち良すぎて苦しいってぐらい責めてあげる」

「ぐいっ、ぐいっ、ぐりぐりー！ うふふ、やめてと言つてのにおちんぽバキバキに張り詰めちゃつて……さつき射精したのにキンタマもずつしり重くなつてる……エツチなことが大好きなんですね」

「もう指ちんぽだけじゃ物足りないでしょ？ 今度はもっと太いオモチャを使ってお尻を拡張して……おまんこになるように開発してあげます」

「ちょっとこつちを見て？」

「このアナルパール……見ての通り、一番太い部分は私の指を束にしたより太いでしょ？ でも先端は細いし、表面はつるつるしてるから、慣れてきたお尻に入れるにはちょうどいいんじやないかしら？」

「じゃあ……挿れますね……」

「まずは一粒目のパール……ん……ちょっとお尻の穴が抵抗してしまってますね。すんなり入るように、手コキで気持ち良くしてあげますから、無駄な力を抜いて、アナルを開発されることだけを考えてね」

「おちんぽシコシコされながらお尻の入り口をちゅぱちゅぱほぐされるのはいかが？ あらあら……可愛い声を出して……気に入ってくれているし、お尻もパールを喜んで咥えめるようになりましたね。えらいえらい」

「それじゃあ、もう一つ増やしますね……ふふ、よく気づきましたね、少しづつ球が大きくなつていくんです。この調子でどんどんお尻の穴を拡げて、わたしのためのおまんこにしていきましょうね」

「もう一つ……一つ……次からはあなたが数えてみて？ お尻からの快感でいつ増えるか分かるでしょ？ ふふ……いいわよ……うん……敏感なお尻ですね……もう少しで全部入りますからね……」

「はい、アナルパールが根元まで挿入されました。じゃあ今度はゆつ……くり引き抜いてみましょ？ んつ……ふふ、お尻が咥え込んでなかなか離しませんね。お尻を奥まで責められるのハマっちゃったのかしら？ いい子だからちょっと力を抜いてね……キンタマすりすりつてさすつてあげますから……」

「んっしょ……うんしょ……ふふ、ずるずるって言いながらアナルパールが抜けてきまし  
た……ん、いまあなたの尻に入っているのは先端の小さい球だけです。どんな気持ちです  
か？ そうよね……気持ちいいわよね……はあ……息を荒げながら、甘くとろけた声を上  
げてるんだもの……正直に答えられたあなたにはご褒美に奥まで挿れてあげる。んっ……  
きつ……んっ、んっ……」

「ふふ、奥まで気持ちよくなるとそんな声を出すのね……お尻のナカもきゅっと締まつて  
……わたしの手であなたが喘いでくれて嬉しいわ。もっと一緒に愉しみたくなつてしまい  
ます」

「これで終わりじゃないから、お射精は我慢してね。できる？ ……んふふ、苦しそうだけ  
どがんばれ、がんばれっ。私がいいつて言うまでザーメン出すの我慢できたら……もお一つ  
と気持ちよくしてあげるから、ね？」

「いい子ね。私も責め甲斐があるし……あなたをいじめるの、とっても楽しいわ。がんばれ  
っ、がんばれっ」

「くちゅくちゅ、くちゅくちゅって喘いでますね。はあ……可愛くて美味しそうなお尻まん  
こになつてきて……ハメるが楽しみだわ……」

「ん……射精を我慢するのも限界みたいね。じゃあアナルパールは抜いてしまつて……と  
……ん、っしょ……」

「次は……こちらのデイルドをお尻に入れてみましょうか」

「これをわたしのおちんぽだと思つて咥え込んで……お尻の穴をセックスできるサイズに  
しちゃいましょうね」

「あらあら、お尻を揺らして……そんなに欲しいの？」

「素直でよろしい。ではわたしも、これを自分のおちんぽだと思つて、あなたとのセックス  
を想像しながらデイルドを挿入してあげますね……だからあなたも、これから挿入される  
のはデイルドではなくおちんぽ、だと思つて下さいね」

「んっ……はあ……あ、んんっ……あなたの尻に……おちんぽ入ってくう……はあつ……  
……あん……おちんぽ気持ちいいよお……んっ、んっ……！」

「はあっ……これでおちんぽ全部入りましたよ……はあっ……あなたのおちんぽ扱いてあげながら、お尻ずぼずぼ犯してあげますからね……」

「ああっ、あんっ、はあっ、あっ、ああん、あつあつ、はあっ、ああっ、あつあ、あつ、あつ、あ、ふうっ、ふあ、あつあん、はあっ、あんっ……はあっ、あっ、あ、はあつ、あつ、あ、やばつ、はあっ、あっ、はあっ、あつあ、ああん、はつ、あつ！」

「はあっ……お尻からすごいやらしい音出てる……あなたのお尻がおちんぽ咥えこみながら締め付けてご奉仕してる音……おちんぽも硬くなつて射精準備してる……はあっ……あなたはお尻犯されながら興奮する変態なんですものね……あなたが犯されてる想像がしやすいように、もう少しお手伝いしますからねえ……」

「んんっ……ん、はあっ……はあっ、あんっ、ああっ！　あっ、ああん、はあつ、あつあ、んんっ、はあっ、あつ、あんっ……くうつ……あつ、あんっ、ああっ、あつ、あんっ、はあ、んんっ、ふ、んんっ、あつ、んあつあつ、あ、はあっ……！」

「ほらほら、早くイつちやいなさいマゾの変態さん。メスイキしながらオス射精して頭の中ぐちやぐちやになるぐらい気持ちよくなりなさい……はあっ……いく時は……声を我慢せず、情けないぐらいのイき声を私に聞かせて下さいね……はあっ……」

「うふふっ、おちんぽびくびくしてきたあ……マゾ射精してうつすい精液びゅつびゅつて無駄撃ちしちやつて。あなたのいくところ、早く見たいなあ……」

「はあっ……イつちやつたのね……わたしにいじめられて即イキしちやつたんだ……」

「おしつこみみたいに薄い精液びゅーって出たねえおちんぽびゅくびゅく震わせながら撒き散らしちやつたねえ……ふふっ、マゾザーメン出すのお上手ね……それにい……おちんぽだけじやなくて全身をびくびくつて震わせながらケツイキもできて……とつても偉いわ」

「ふたなりとつがいになれる立派なマゾオスになれてえらいえらい……ふふっ……きよどんとしてるけど、気持ち良すぎて何が起きてるのか分かつてないの？　かーわいいいっ」

「かわいいから……もつとしたくなつてきちゃつた……もう少しお付き合いしていただけるかしら？」

「ねえ見て……」

「あなたのえっちなところを見たから、わたしのおちんぽガチガチにフル勃起しちゃったの……はあ……触つてみてくれるかしら？」

「分かるでしょ？　このまま何もしないなんて耐えきれない……だからあ、あなたにはおちんぽを興奮させた責任をとつて欲しいし……まだ付き合つてないのに、セックスしたくなっちゃつてるの……どうすればいいかしら……？」

「そうよ、あなたとセックスしたいの……もちろんあなたが嫌なら我慢するけれど……」

「ふふ、おちんぽ見ながらヨダレ垂らして……あなたもセックスがしたいのかしら？」

「つまりわたしたち両思いなのね……せつかだから、アナルとおちんぽの相性も今日のうちに確認してしまおうかしら？」

「決まりね。ベッドに仰向けになつて待つていて」

「ええと、ゴムは確か……」

「あつたあ。お試しセックスだもの、きちんとゴムはつけないとね……」

「じゃあ、ゴムありセックスしましようね……」

「うふふ……」

「入れるわよ……」

「んっ……うおっ……お……はあ……あ、んんっ……！」

「はあっ……すごい……わたしのおちんぽが根本まで入るなんて……これは運命ね……はあっ……じゃあ……次は……わたしがいくまであなたを犯してあげる……」

「はあっ……ん……く……はあっ……んんつ……はあっ……ふ……んんつ……ふうつ、あ、  
はあっ……あん、あ、はあっ……あ、ふうつ……！」

「すぐおい……！ お尻の粘膜がわたしのちんぽに絡みついてえ……射精促してくれてる  
う……はあっ……あんつ……はあっ……こんなに気持ちいいセックス初めて……はあっ……  
相性良すぎ……やつぱりあなたとわたしは運命の相手なのね……はあっ……好き……大  
好き……心だけじゃなくて……おちんぽもあなたに恋しちゃってるの……」

「あっ、ああっ、あん、はあ、んんつ、はあ、んつ、あ、んんつ、あつあ、あ、あつん、あ  
つ、あつあ……はあつ、あつあつ、あんん、はつ、ああつ、あつん、ふ……んんつ……はあ  
つ、あつ、ああん……あん、はあ、んんつ、はあ、んつ！」

「あんっ、あ、はあっ……すごいよお……腰振るの止まらないい……！ お試しセックスな  
のにい、はあっ、あなたのお尻まんこガン掘りしちゃってるのお……ふうつ、ん、はあっ、  
あっあ、はあっ……こんなに激しくしたら……すぐイッちやうよお……もつとじっくりあ  
なたとしたいのに……はあっ、あ、んんつ……」

「はあっ、あ、あなたもイきたいの……はあっ、それなら……一緒にイきましょう……？  
あなたがイった時にぎゅうううつてお尻締め付けて、わたしのことをイかせてちようだい……  
はあっ、ああっ……」

「くつう……あ、はあっ……んあ……はあはあ、あ、んんつ……あんつ、はあっ……！ だ  
めえ……我慢、あ。んうつ、はあ、あつあ……だめえ、も、あ、イッちや、はあっ、ああっ！  
はあっ、はあっ、はあ、あ、ああっ！」

「おおおっ……おあ……はあっ……イった時の締め付けすごい……ゴムの中にどっぷりどつ  
ぶ射精して……はあっ、あ、んんつ……！」

「はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……」

「ふふっ……はあっ……見て……わたしのおちんぽに引っかかってるゴム……たっぷり精  
液を注がれて、風船みたいに膨らんじゃってるわ……！」

「ああ……っ」

「はあっ……こんなにたっぷり射精したのに、おちんぽまだ満足できないの。見て……まだ反り返るぐらい勃起してるのよ……」

「あなたもまだセックスしたそうな顔をしてるから、もう一度シたいんだけど……」のホテル、備え付けのゴムがひとつしかなかったの……」

「ええっ？ もつとセックスしたい、と言つてくれるのは嬉しいけど、会うのが二回目の相手とナマでセックスするのは躊躇いが……ふふ、でも、あなたが結婚相手だったら、何も気にせずに生ハメして、本気のセックスを味わえるんだけど……」

「朝もおはようの中出しでしよう？ お仕事から帰つたらおかえりなさいのセックスをして……夜は気絶するまでハメ倒されるの。もちろんお休みの日は朝から晩まで犯してあげる」

「わたしの言葉に興奮してる……やつぱり生ハメしたいのね……」

「悪い話じやないでしよう？ わたしと結婚して、わたしに人生を委ねるだけで、好きなだけふたなりのデカチンに中出しされて気持ちよくなれるのよ？ 悪い話じやないと思うんだけど……どうかしら？ わたしのおちんぽで、おかしくなるぐらいの快感を味わつてみない？」

「わたしと結婚して、身体も心もいっぱい愛されてくれるかしら？」

「それなら……誓いの言葉を言つて。今から私が言うことを、心から望んで口にするの。… 『武珠司の可愛い可愛いお嫁さんになつて一生愛し、愛され続けます』と言いなさい」

「うん……うん……舌がもつれるぐらい必死になつて言つてくれて嬉しい……はあ……あなたが私のお嫁さんになつてくれる……ずっと……あなたが私のものに……だめ、もう我慢できない……」

「じやあ今から生ハメして……遺伝子混ぜ混ぜして子供を作る予行練習をしましようね……その前に、私のお嫁さんに大好きの気持ちを込めてキスしてあげる……」

「じゅる、ちゅぱ、ちゅうつちゅ、れろ、じゅるる、ちゅぱ、ちゅうつ、ちゅつちゅ、れろ、じゅるる、ちゅぱ、ちゅつちゅう、ちゅうつ……ふはあ……もつと……ちゅつ、じゅるる、ちゅうつ、ちゅつちゅ……はあつ……」

「それじゃあ……生ちんぽがあなたのおまんこに入りますからね……」

「んんっ……はあっ……あ……さつきイつたばかりだから、お尻のナカきつい……それに、わたし……とつても興奮してるから……入れただけで精液出ちやいそ……」

「我慢……我慢……ふたりで気持ちよくならなきや……わたしたち、愛しあってるんだから……はあっ……」

「はあっ……全部入った……これからあなたのことハメ漬して、どうやって孕ませられるかを教えてあげるわね……」

「はあっ、はあっ、はああ……ん、はあ、あ、んんっ……ふうっ、あ、いいっ、はあ、あ、あ、あ、ああ……！　いいよお……大好きい……！　んおっ……はあっ、あんっ、はあっはあっ、あ、んんっ！　はあっ、あ、んんっ……あ、はあっ、あつあ、んんっ！」

「はあっ……あなたのアナルが壊れないように……くうつ……慣れるまで腰、動かさないようにしてようと思ったのに……ダメえ、こんなに気持ちいいおまんこのナカにおちんぽ突っ込んで我慢するの無理い……！」

「んおっ、おおっ、おおっ……おおっ、おつお、おうっ、おつ……んおおっ……はあっ、あんっ、く、ふうっ、はあっ、あつあ、はあっ、おつおっ、お、うおおつ……つひ、あ、あーっ、あ、ああっ、あああっ！　らめえ、腰動かすの止めらんない……！　はあっ、あ、んお、あへあ、あ、んんっ！」

「はあっ、しゅきいつ！　あなたのおまんこに生ちんぽハメするの大好きになつちやつたあ！　はあっ、んお、はあっ、いまわたし絶対アヘアヘした恥ずかしいエロ顔になつてりゅ……はあっ……あなたとセックスてきて嬉しそぎて顔ゆるゆるになりゅう……！」

「ふうっ……あへえ、あつん、くうっ……あ、あっ！　はあん、あつあ、うあ、あつあ、んんっ！　ふうっ……あーっ……あ、んあ、おおっ！」

「はあっ、あんっ、ああっ……あなたと出会えなかつたら、はあっ、絶対こんな気持ちにならなかつた……わたしがほしかつた運命の人……はあっ……もう絶対に離さない……どんな手を使つても……はあっ……絶対に……あなたは永遠にわたしのものなんだからあ……」

「……」

「ね……あなたもわたしのことをぎゅーってして……おちんぽとアナルだけじゃなくて、もつと身体全体でくつつきあいたいのぉ……！」

「はあっ……あなたの体温が肌から伝わってくる……幸せ……はあっ……このままふたりで溶け合っちゃいたいくらい……はあっ……あーっ……おちんぽもぎもちい……んおおっ……熱くてぬるぬるのお尻でぐちよぐちよに締め付けられてえ……溶けちゃいそうだよお……」

「はーっ……はああ、はーっ……おうっ！ 好きな人とする子作りぎもちいよお……はあっ、ね……わたしのこと愛してるって言つてえ……はあっ……あんっ……あなたからの愛の言葉、おちんぽにぎゅんぎゅん来る……はあっ……わたしも、あなたのこと愛してる……だから……はあっ……もつと一緒に……ふたりで気持ちよくなろうね……」

「ちゅっ、じゅるっ、ちゅううっ、んっく、ちゅっ、ちゅっ、ちゅううっ、じゅるっ、ちゅっ、ちゅううっ、ちゅぱ、じゅる、ちゅっちゅ、ちゅううっ、じゅる、じゅるる、ちゅぱ、じゅるっ、じゅぶっ、じゅるっ！」

「はあっ、んへえあ！ はあっ……いいよお……ふたりでするガチハメセックス気持ちいいよおっ……わたし、あなたが気持ちよくなるようにいっぱいおまんこかき混ぜるからあ……いっぱい気持ちよくなつてメスイキしてえ……！ そしたらわたし、とつても嬉しいから……」

「んはあっ！ あっ、あつあ、うおおっ！ あつんく、おつお、はあっ、あつあ、んんっ、くっ、あつはあ、あ、んあ、あつあ、あ、んんっ、うお、おおっ！ はあっ、あ、んんっ！」

「はあっ……メスイキしてくれたの……？ お尻まんこの奥、ぎゅつて締まつた……はあつ……あんっ、でも、あなたのおちんぽまだ硬いわね……はあつ……」

「はあっ……わたし、もうイきそだだから……あなたも……ね？ シコシコしてあげるから……一緒にイつて……？ 射精しながらわたしのザーメン、お尻まんこの奥で受け止めてえつ……」

「はあっ、あっ、はあっ、あんっ、あっ、あっ、あつあつ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、はあっ、んおううつ！ はあっ、はあっ……ああっ！ あつあつ、はあっ、ああん、はあっ、あつ、ああん！ あつ、ああん、あつあつ、はあっ、ああん、はあっ、あっ、あっ、あっ、ああん、はあっ、あっ、んんっ、ふう、んう、あふうつ、あ、はあっ！」

「はあっ、あっ、いく、いくいくいくつ！ はあっ、あ、生出し、するつ……あつく、あ、ああっ、あ、あ、あーつ！」

「ふーっ……ふーっ……おおつ……すつご、まだ出るつ……はあつ……ああつ……わたしのザーメンの量だけであなたのお腹膨らんじやいそう……はあつ……あつ……んんつ……はあつ……」

「ちゅうっ……んちゅ、ちゅぱ、ちゅううつ、じゅるつ、ちゅぱ、ちゅううつ、ちゅつちゅ、じゅる、ちゅううつ、ちゅぱちゅぱ、じゅるつ」

「はあつ……気持ちも、身体も深く繋がれたわね……これからはずーっとふたり一緒に生きていきましょうね……わたしの大事なあなた……誰よりも愛してるわ……ちゅつ」

「ふんふふーん♪」

「あら？ まだ寝ていなかつたの？ いっぱいセックスして疲れたんじやない？」

「男の人って体力がすごいのね。私は……さすがに眠いわね……」

「実は……寝る前に少し相談があるんだけど、いいかしら？」

「あのね……どんな結婚式にしたい？ あなたとの結婚式だから、盛大にやるべきだと思うんだけど……」

「ふふっ、そうね。ふたりでゆっくり考えていきましようか……」

「わたしは、本当に嬉しいの……だから気持ちが急いでしまって……ごめんなさいね」

「ふふふっ、ありがとう……これからよろしくね。大好きな……かわいいかわいいわたしの  
お嫁さん……ちゅっ」